文化祭でバレエ部の発表、ヒロインの女子が全裸に

大学のキャンパスは、秋の日差しに照らされながら、文化祭の準備で活気づいていた。広場では模擬店の香りが漂い、学生たちは机を運び、飾り付けをし、壁新聞を貼り付けていた。そんな中、バレエサークルの公演が今年の話題の一つとして盛り上がっていた。特に、ストラヴィンスキーの「春の祭典」上演のニュースは、キャンパスをざわつかせていた。

加奈はバレエサークルのスタジオに通う日々を送っていた。彼女の長い黒髪はいつもシニヨンにまとめられ、その動きは舞う蝶のように優美だった。彼女の美貌と才能は、彼女が歩くたびに周囲の視線を集め、男子学生からは熱烈な視線を、女子学生からは羨望の視線を浴びていた。

「加奈、チケット、配れる？」と友人から声をかけられ、彼女は笑顔で頷いた。そして、友達にチケットを配りながら、「これが私の集大成の舞台なんだから、絶対に見に来てね！」と強調していた。しかし、その言葉の裏には、彼女の大きな葛藤が隠されていた。

「春の祭典」のクライマックスでは、加奈が演じる生贄の少女が全裸で踊るシーンがある。彼女はその事実を知ってから、毎日を悩みながら過ごしていた。『私、本当に全裸であの舞台に立てるのかな…』と鏡に映る自分の姿を見つめながら、何度も問いかけた。彼女は自分の裸体が全校生徒の視線に晒されることを想像するだけで、羞恥心が湧き上がった。

彼女は自分の部屋で、何度も鏡の前で裸で踊る練習を試みたが、一度も完遂できなかった。『私の裸を見る人たちは何を思うだろう？』と考えると、心が締め付けられ、涙が出そうになる。彼女は自分に言い聞かせるように、何度も「私は役者だ。役者として、裸にな

るのは必要なこと」と言っていた。彼女は日々、自分の羞恥心と闘っていた。

噂は瞬く間にキャンパス中に広まり、加奈が裸になるという話は男子学生たちの間で特に盛り上がった。「マジで？加奈が裸で踊るって本当に？」とある男子学生が、友人に確認するように言う。「俺、絶対に見に行くぜ。加奈の裸かよ、想像するだけで興奮する」と別の男子が応える。興奮と好奇心から、彼らはチケットを手に入れるべく、友人知人に頼み込んだり、金を積んだりして、チケットはたちまち完売となった。

男子学生たちはキャンパス中で、加奈の裸を見ることへの期待を隠せず、「バレエとか全然興味ないけど加奈の裸を見られるの楽しみすぎる」とか、「彼女の裸体を見れるだけで、もう他には何もいらないって感じだな」といった会話が飛び交っていた。

文化祭までの日々は、加奈にとって苦しみの日々でもあった。彼女は毎日の練習で、裸に

なるシーンのリハーサルを避けるようにしていた。監督からは「役者として、裸になるということはその役への敬意を示すことだ」と言われたが、彼女はいまだに羞恥心の壁を壊せない。

一方、男子学生たちは加奈の公演を待ちわびていた。キャンパスの隅々で、「加奈の裸ってどんな感じなんだろうな」「きっと、想像以上にかわいいだろうな」といった会話が繰り広げられていた。ある男子は友人に、「彼女が舞台の上で全裸になるって想像するだけで、もうズボンが苦しくなるよ」と笑いながら言う。そして、当日を心待ちにしていた。